

「さばきかた」は生きものがモノになる過程を考える研究室。研究員の東と塩田で活動。屠畜をはじめ、さまざまな「折り合いかた」について考える。

おぼへん

「さばく」という言葉には、二つの漢字があります。「裁く」と「捌く」。前者は、理非を明らかにする裁判の意味。後者は、「魚を捌く」など解体・処理したり、扱いにくいものをうまく扱ったりするという意味があります。さばきかた研究室は、その名の通り「生きものの捌きかた」を考える研究室でした（魚を三枚おろしにする方法を研究するわけではなく）。我々の普段の生活のために他の生きものが沢山使われているということを改めて思い返し、その上でどのように暮らしていくか、ということを考えるための活動でした。生きていく限り、肉や魚や他の命を貰い続けなければいけません。それはどうしようもないことで、その前提に対して何らかのアクション——反対や抵抗を起こそうというわけではありませんでした。他の命を貰うという行為の是非を決める（＝裁く）ことは到底できません。ただ、どうしようもないことを考えないのは、よくないのではないかと思っ

のです。

それは「食育」や「道徳」ともまた違い、一種の諦めのような、前向きな「あきらめかた」について考えるということだったように思います。つまり、どうしようもないことを、どうにかうまく扱ったり折り合ったりできる地点を探す（＝捌く）こと。言い換えるならそれは、目の「そらしかた」ではない何かでした。

「後ろ」うしろ

少し私的な話をします。私は小学生のころ、一夏のあいだ蚕の幼虫を大切に育てました。毎日餌の桑の葉を取りに行き、その実を自分もおやつとして食べます。夏休みが明けたある日、その日の理科の実験は蚕の蛹を熱湯に入れ、生糸を巻き取るというものでした。厚紙に一ミリほどの生温い糸を巻きつけると、糸は光に当たってキラキラしてとても綺麗です。湯のなかの蚕は沈んで死んでいました。

私はこのことをよく思い出し、考えてしまいます。当時ふと思ったのは「この糸が布になって服になる」という当たり前のことでした。つまり、自分はこの虫の犠牲の上で服を着ているということです。いま見えているものの「後ろ」を初めて見たとき、子どもながらにとっても恐ろしくなったのを覚えています。

JS CO. LTD.

センタービル

ワンステツババス



研究員の塩田は似たようなことを、肉について思っていたといいます。コンビニのチキンの陳列を見て、その「後ろ」のことを想像してしまう。我々は何を隠したり、見ないようになっているのだろうか、と。

何かを考え、つくり始めるとき、一体何からスタートすべきなのでしょう。仮に一人のアーティストであったなら、自分の思う創作をして作品をつくるかもしれません。ここはつくりかた研究所でした。一人のアーティストではない研究員が、誰かと何かを始めるには、普段どんなことを考え、どんなものを見ているのかを知り、お互いが味方になることが第一歩でした。我々の場合は、この「後ろ」についてが、一つの信頼関係になりました。自分が考えてしまうことに関して、他人でも同じように考えているひとがいる。それはもしかしたら、そのことについて考える必要性や価値があるということなのかもしれない。そんなことを考えながら、さばきかた研究室を始めました。

つくる手前

当初の問題意識や興味は、生きものが「モノ」になる過程のことでした。たとえば、牛が食用肉になる変換点はどこにあるのか。グラデーションか、境界線か。「モノ」にするときに、人間にはどう折り合いをつけている・いないのか。そんなことを考えながら、積

極的にリサーチを始めました。食に関する展覧会、博物館や資料館に行き、肉を題材に扱っているアーティストや写真家に会い、屠畜に関する書籍などを読み始めました。

ところで、さばきかた研究室は、早い段階で研究室と名乗り、リサーチに回り活動の履歴をつくり、それを他のひとたちに意識的にアピールしていたように思います。つくりかた研究所がトップダウンでない方法で活動をするにあたり、自分たちで何かを始めるということを積極的に実践してみる（みせる）ことで、他のところにも火がつけばいいと思っていました。実際のところ、さばきかた研究室は最初の勢いだけで終わり、他の研究室が盛り上がっていったのですが。

それでも、足を使い調べたり考えたりしに行くことは、とても必要なことでした。知識のない状態から「つくる」には、まずそのことについてよく知り、考える必要がありました。そもそも屠畜とは何か、屠畜業とはどんな仕事か。そこに関わるひとは。どんなしがらみがあって、どんな歴史があるのか。製糸業は。知るべきことは無限にあります。他の研究室への布石というのはまったく真の目的ではなく、結局のところ必須活動だったのです。

屠畜という対象について、どういう目線で切り込み、どういう狙いでつくるのか。それには前提として、対象がどういう歴史や問題をもっている現在あるのか、ということをおわかっていて必要を感じていました。その上で、つくる方法や目線が選択できるのではない

か。我々はまず、その選択の手駒をもつことから始めなければなりませんでした。

さばきかたの問題

少しずつですが順調にリサーチを進めたさばきかた研究室は、二〇一四年五月、研究室活動のプレゼンテーション会を迎えました。しかしこのとき、偶然にも何か大きな方向性に引っ張られていました。東が長年飼っていた老犬が亡くなり、塩田がお世話になっていた大学の先生が急逝されました。それぞれは何の関係もなく、それぞれの話でしたが、ただあまりにもあつげなく、この出来事はそのときの自分たちを強く揺さぶりました。偶然にも同じ春先の出来事でした。

結果、さばきかた研究室はそれまで考えていた、食や日常生活のなかでの問題だけではなく、もっと大きな範囲の折り合い、つまり生き物の「死」自体への意識が強くなっていました。葬儀やさまざまな看取りの方法、誰かが死んだあと自分はどう折り合いをつけていくのか、といったことが話題に上がり、次第に関心の対象となっていくたのです。

しかしプレゼンテーション後に気がついたのは、問題や対象が大きすぎることでした。何より、「死」自体に対する精神的な追求が必要になってしまい、それについて自分たちはまだ何も考えられません。対象は、我々がいますすぐに考え扱える範囲を大きくはみ出し

ているように感じました。

ここでさばきかた研究室は、自らストップをかけました。研究室活動に予算をつけず、『だれかのみたゆめ 展示と実演』でも発表せず、リサーチ費用はこれまで通り自分たちで出し、内々で考えることを引き続きすることになりました。その年（または次の年も）発表できる企画や作品としてかたちにすることを目指すのはやめたのです。

目の「そらしかた」ではない何か

では、さばきかた研究室は失敗したのでしょうか。なくなったのでしょうか。

つくりかた研究所での三年間を顧みて、さばきかた研究室が積極的なストップをかけたことを考えると、作品や企画を「つくらないこと」というのは必ずしも「やめにする」「目をそらす」「考えない」とは同義ではないように思います。むしろ「つくらない」＝アウトプットしない＝考え続ける、という、先に向けた気の長い行為のようにも思えるのです。

では、考え続けたら、つくったり発表したりできるのでしょうか。そもそも、生きものの生死を扱った何らかの作品をつくったり発表したりすることはどれくらい必要なのでしょうか。こんなことをいったら元も子もありませんが、どうしても考えてしまいます。何かをつくる時、それは何のために、誰のためになるのでしょうか。

つくらないという問題には、もう一つの側面がある気がしています。私も塩田も普段はそれぞれ、演劇活動なりアートプロジェクトなり、何かしらの「つくる現場」に関わっています。そこでは日々、何かをあたちにするための試行錯誤が繰り返され、面白い発見に満ちています。ただ、「つくって出す、そして次へ」というスピード感は新鮮なものを生み出すためにとても重要だと思う一方で、どうしてもそれだけではしんどい気もしてしまうのです。私はいまあるものの「後ろ」を想像します。作品の「後ろ」を考えたとき、それは誰によってどのようなようにつくられて、そして誰が消費しているのでしょうか。観客やお客さんでしょうか。それとも、作家やつくる現場のひとたちでしょうか。

つくりにかた研究所はつくってもいいし、つくらなくてもいい場所でした。さばきかた研究室はその結果、「つくらない」という状態にあります。マグロが泳ぎ続けなければ死んでしまうように、つくりに続けなければ死んでしまうひともあるかもしれません。やはり同時に、つくりに続けていると死んでしまうひともあるはず。私はさばきかた研究室を、インプットし考え続ける場として保っておきたかのように思います。それは、自然と見えなくなってしまう（目がそらされてしまう）部分、つまり、生活の「後ろ」や創作の「後ろ」に目を向け続けることだったようにも思うのです。